

ほととぎす考(続)

井 上 豊

目 次

- 六 東歌とホトトギス
- 七 「時すぎにけり」の解釈
- 八 「かんごどり」・「よぶごどり」の実体

六 東歌とホトトギス

『万葉集』には前記の様に、ホトトギスを詠んだ歌が多数見られるが、東歌では、

信濃なるすがの荒野にほととぎす鳴く声注。きけは時すぎにけり(三三五二)

という一首があるのみである。この歌の解釈については、諸家によって紹介されている如く、古来区々の説があつて、「すが」の所在は別とする。契沖は、「霍公鳥ハ農ヲ催ホス鳥ナレバ、サル心ナドニテモカクハヨメル歟」

(『万葉代匠記』精撰本)としてゐるが、「時すぎにけり」は時が来た意と解する。真淵は、卷十四の冒頭五首につき、「こゝにのする五首の中、初二首と末一首は東ぶりならず、京に久しく仕奉て歸りをる人、東にての歌故に是に入しなるべし、かゝる類下に多かり」と説いたのち、「末一首」すなわち三三五二番の歌に注して、

旅に在てとく歸らんことを思ふに、ほととぎすの鳴まで猶在をうれへたるすがたも意も、京人の任などにてよめりけん、又相聞の方にも取ば取てん(万葉考)。

とし、京人の任地での作と見て、「時すぎにけり」は普通の意味に解し、相聞の意味も「取ば取てん」といった程度に認めてゐる。『略解』もほぼ同様の見解であるが、真淵の解釈に従つたのである。『古義』は、

歌ノ意は、春の末かぎりに逢むと人に約置しを、得逢ずして、夏来て霍公鳥の音に驚きて、彼が鳴を聞けば契りし時はや過にけり、と云るなり、

とし、相聞を主として京人説をしりぞけている。農時と関係させるにしても、相聞を主意と見るにしても、土地の人間の歌と考えるのであるが、京人の作と考えれば、東歌の中に京人の作がまぎれこんだことになる。「時すぎにけり」については、井上通泰氏は『新考』で、「夫の帰り来べき時なるべし」としている。鴻巣氏の『全釈』は『考』の説に従う。武田祐吉氏の『全註釈』もほぼ同じ。折口信夫氏は旅人の歌と見る説とともに農事と関係すると見る説を挙げる。窪田空穂氏は契沖説に従うが、郷土性を強調している。土屋文明・佐佐木信綱両氏ともに相聞の意を主とした民謡と見ている。大久保正氏は、諸説を紹介したのち、東歌と農耕生活との関係を否定し、ホトトギスの風雅性を強調して（松岡静雄説を援用する）、東歌の世界からホトトギスを追放すべしと説いている（『万葉の伝説』『万葉集東歌論故』所収「東歌のほととぎす」「東歌のほととぎす再考」）。沢瀉久孝氏も『万葉集註釈』で、大久保説を穩当ではなかるうかとしているが、荒野を埋葬の野と見て、ホトトギスを懐旧の鳥とし、地方官人の愛誦歌だったらう、と見る中西進氏の様

な説も出ている。

虫麻呂のホトトギスをうたった巻九の長歌が検税使大伴卿の筑波山に登って作った歌のすぐ後に載っており、次には同じく虫麻呂が「旅の憂へ」を慰めるために筑波山に登って作ったという長歌が見える。続いて筑波山の「耀歌会」をうたった歌を載せ、「高橋蟲麻呂歌集中出」と注している。ホトトギスを詠んだ歌は、検税史に随行しての作と思われる。巻十四のホトトギスを詠んだ歌も、そうした性質の歌と見れば自然な気がするが、そういう歌をば、東歌を集めた巻十四の冒頭に載せているのは、どういう理由からであろうか。

この歌を民謡と見て、相聞を主とするという説は、この形のままでは無理があるが、元來民謡だったのを改作したものとも考えることもできる。防人の歌などには改作の例があり、東歌全体についてもそうした問題はとりあげられている。（改作といってもかえ歌や転化を含む広義のものである）。それについては、巻十四の巻頭五首のうち、ホトトギスの歌の直前二首は、常陸の筑波山を題材にした作であるが、虫麻呂は常陸に在任したことがあり、右の様に筑波と特殊な関係があつて、『常陸風土記』の編者に擬せられたりしていることに注意したい。虫麻呂はまた巻十四の編者にも擬せられている点にも注意する必

要がある。巻頭五首のうちの最初の二首は、上総と下総の地名がよみこまれていて、歌風も洗練され、民謡らしい特色は乏しく、二首とも単純に上総や下総の地名がよみこんである点から東歌としたとしか思われないが、どうしてこうした房総方面の歌を巻頭にまとめて載せたのか。葛飾の「真間のてこな」を詠んだ長歌も、「高橋蟲麻呂之歌集中出」とあって虫麻呂の作らしく、虫麻呂は房総方面に足跡を延べたこともあるらしい。そうすると、五首のうち四首については虫麻呂との縁由が考えられ、五首目のホトトギスの歌の改作も（改作とすれば）、虫麻呂あたりかも知れないということになる。筑波山関係の二首は民謡らしい性質の濃厚な歌であるが、調子が整いすぎていて、同様に改作のあとも考えられないことはない（巻十四の分類標目につき、真淵は巻首に「東歌」とある以外は後人の加筆と見て、「相聞」「挽歌」等を削っているが、沢瀉博士は『万葉集』の目録に従い、巻頭五首を雑歌と見て、「上総歌雑歌」「常陸国雑歌」という様に改めている）。

なお考えると、巻頭の歌、

なつそひく海上瀉なみかみだの沖つ渚すに船はとどめむさ夜ふけ
にけり（三三四八）

は、巻七の、

わが舟は明石あかしの湖うみに漕こぎ泊とどてむ沖おきへなさかりさ夜ふ

けにけり（二二二九）

の類歌であり（類歌というより類型歌である）、次の歌、

かつしかの真間ま*の浦うらまを漕こぐ船ふねの舟人ふねびとさわく波立なつ
らしも（三三四九）

は、巻七の、

風早かぜはやの三穂さんほの浦うらみを漕こぐ舟ふねの舟人ふねびとさわく波立なつら
し（二二二八）

の類歌であって、巻七の連続した二首の歌の類歌が、順序を逆にしたまま巻十四の巻頭に収められている。これは偶然とは言いがたく、さらに巻十四の巻頭に換歌として載せられた。

かなし妹いもをいづち行かめと山やますげの脊そがみ向むかひに寝ねしく今
し悔なげしも（三五七七）

は、巻七の、

わが脊せをいづち行かめとさき竹たけの脊そがみ向むかひに寝ねしく今
し悔なげしも（二四二二）

の類歌であり、この二種の場合明らかに改作（かえ歌）の關係が考えられる。巻七は巻十四と同じく作者不明の歌を収め、一二二八・一二二九の二首は「古集中出」とある中の作であり、巻十四の二首が巻七のに拠った改作と考えられる。挽歌も同様と思われ、巻十四の三首は巻七と共通の資料に拠って、改作のうえ首尾を補ったと推定

されるのである。卷七は愛誦された作者不明の古歌を類集した趣があり、流行歌の性質を帯びた作が多く、改作転化の可能性も多かったはずで、ホトトギスを詠んだ三三五二番の歌もそうした面から考察する必要があるであろう。ただし三三五二番の歌は、「信濃なるすがのあら野」と言う様に、はっきり特殊な地名を読みこんでいて、それだけ土着性をもつことは否定できない（妙義山・碓氷峠方面にはカッコウ・ホトトギスが多いと言う）。

東歌については、民謡と見るのがほぼ従来通説になっていたが、「宮中の年中行事の結果として集まった歌詞の記録であったのだらう」とする折口説もあり、後世の東遊歌・風俗歌の類に擬する見解も有力になっていて（水島直治氏など非民謡説を力説している）、そういう点からも改作や転化の可能性は大いにあり得る。けれども東歌には露骨な性的表現を特色とする歌が東歌には多く、これらが簡単に宮廷に迎えられたとは思われない。流行歌^{註12}としてはこの種の歌がもてはやされる可能性が多く、東歌は宮廷歌謡との関係よりも、流行歌としての性質を問題にする必要があると思う。東歌の定型性にしても、流行歌とすれば問題がなくなる。卷十一・十二は「相聞往来歌」とあるが、関西の流行歌の類が含まれている様で、

卷十四には東国の流行歌の類が収められたと考えられることもできる。万葉時代にはまだ民謡と流行歌の異同ははっきりしなかったと思うが、区別して考えて見る必要がある。

七 「時すぎにけり」の解釈

旅路の作としても、農耕生活と結びつけるにしても、「時すぎにけり」の解釈に疑義が残る。旅路の作とすれば、比較的にわかり易いが、農耕生活と結びつけるのは無理がある様に思う。契沖は「時すぎにけり」を、時が来た、という意味に解しているが、普通の意味にとれば、ホトトギスの鳴く音をきいて、時が過ぎたと言っているの、田植えなどをさすとは思われない。カッコウは豆まき鳥などとも呼ばれ、古くから播種と結びつける民俗もあるらしいが、播種の時期を思い出している歌とは考えられない。それに、ホトトギス（中国のはカッコウ）を時鳥と書いたりするのは、中国でも日本でも万葉時代より時代が下ったの事で、農耕生活との関係にさほど敏感だったとは思われないのである。契沖がホトトギスについて、「農を催ほす鳥」と言っているのは、『蜀志』あたりの記事を念頭に置いての事と思うが、『蜀志』の子規はカッコウを指すらしい、日本の東国にそうした知識が

普及していたとは思われない。民間の俗習としてはホトトギスと農事との関係を否定することはできないにしても（万葉時代でも、家持のころにはホトトギスと季節の関係を、よみこんだ歌は多く見える）、「時すぎにけり」の「時」は、ホトトギスが鳴く時よりも先行するので、どういふ「時」をさすかは別に考えなくてはならない。一般にホトトギスの鳴く「時」と「時すぎにけり」の時を混同して説く傾向がある。

元来この歌について問題が起ったのは、表現が東歌らしくなく、民謡性に乏しい点からである。洗練された表現から見ても、単なる民謡とするには無理があるが、民謡の改作と考えることもできる。元来が民謡とすれば、「時すぎにけり」の意味が漠然としているのも理解できると思う。「時すぎにけり」は、明瞭な様ではっきりしない言葉であるが、民謡には原始的な象徴性があり（従って表現不足もあり得る）、「時すぎにけり」の曖昧さは、民謡的な句法の名ごりとも考えられるのである。改作歌の例については、前に挙げた以外に、巻十四にはまた、
相見てはちとせやいぬる否をかもあれやしか思ふ君
待ちがてに（三七四〇）

という歌があつて巻十一にも同じ歌（二五三九）が「正述心緒」歌として出ている。「相聞」とあるが、巻十一

のは流行歌の類として流布した作らしく、東国に伝わって東歌に採られたものか。（普通の東歌のタイプではない）。巻十四のは「柿本人麿歌集出也」とあるが、人麿の作かどうかは問題としても、そうした歌も巻十四にはまぎれこんでいるのである。これらは民謡（狭義）というより流行歌と考えられる。改作説は、阪本信幸氏も一おうの意見として発表しているが（『万葉』第七三号「万葉集東歌私見」）、「元東歌」を家持が改作したとする。けれども改作（あるいは転化）があつたとすれば、家持が編纂に関係するよりも早期の段階と思う。

尾崎暢殃氏も『国学院雑誌』昭和四十七年十二月号所載の「東歌とほととぎす」において、東歌に関する諸説を紹介検討したのち、東歌と実生活の関連を認めながらも「東歌の原態は、生活的な場におけるよりも儀礼的環境や祭儀の場あたりを背景としたかと思われる」とし、「時すぎにけり」の時の内容が漠然としているのもそのためかと説いている。「時すぎにけり」の「時」が漠然としていることは確かで、祭時とか花ときなどを意味することもあり得る。旅路での作とすれば、帰るべき時といった説のほか、出発した時とか、他に特殊な記憶につながる時など、様々な意味にも解される。相聞の意味にもとれるが、巻十四の巻頭の雑歌に入れたのは、相聞の

意味がはっきり出ていないためではなからうか。民謡・創作歌いずれともとれるが、「時すぎにけり」は、厳密に考えると、創作歌としては表現不足で、民謡を根底とすると考えたい。

八 「かんこどり」・「よぶこどり」の実体

カッコウはホトトギスよりも世界的に分布の広い鳥で、万葉時代の日本にも多く見られた鳥と思われるが、『万葉集』では、一字一音式の表記のほかには、霍公・霍公鳥がホトトギスの表記に用いられているのみである（漢語では郭公はあるが、霍公は見えない）。ホトトギスと混同されていたほかに、別の名で呼ばれるということもあり得る。古い時代には、一つの名に定着するまでには相当期間を必要としたことであろう。『倭訓栞』には、簡単に「郭公をかんこどりといふは非なるべし」とあるが、『諸国遊奇談』（文化三年刊）には、

おのれ諸国巡遊の折から、奥羽に四五年こなたかなたに遊びをりし御り、かんこ鳥のことある雅人に問ひければ、此の人のいへるは、こゝに居玉ふ中には是非この鳥とりて見せんと云ふによりてまことに、ほどなく其の鳥を得たりとてみせぬ、こはこゝの山里には五平鳥といふとなん、名義を尋ねれば、五平々

々と鳴く故也と云ふ、またこの辺の里にては同じ鳥なれど、かっぽう鳥といふとなん、こはガツポウウと鳴く故なりとぞ、さてカツポウ鳥といふは、歌にかほ鳥といふにあたり、かんこ鳥は呼兒鳥の訛言なり、その状は凡そ鳩に似て、かしら・尾かけて薄黒也、腹はしろきに赤き気味あり、すゝみ鷹のさまにて斑あり、喙鳩のごとくして、少しくながくうす赤く見ゆ、○和歌家に、喚兒鳥・貌鳥・貞鳥・果鳥・妹鳥、などさま々の口伝・口決をまうけていふは、皆同鳥の異名なり、大かたは、鳥は啼声をもて名とすることおほし。

とある。「かほどり」は、『万葉集』に奈良の古京を偲んだ長歌に、「貞鳥はまなくしは鳴き」（巻六、一〇四七）とあり、卷十の作者未詳の歌にも、「朝の井でに來なく果鳥汝だにも君に恋ふれや時終へず鳴く」（一八二三）などと詠まれている。よみこまれた数は少いが、親しみ深くうたわれている。カホ（オ）ドリの正体ははっきりしないが、カッコウと見る説がもっとも有力であり、ヨブコドリ・カオヨドリと同じとする説もある。仏法僧目のカワセミまたはヨタカとする説もあるが、そうした特殊な鳥とは思われない。「よぶこどり」（呼子鳥・喚子鳥）は、やまとには鳴きてか來らむよぶこどりきさの中山よ

びそ越ゆなる(七〇) 高市黒人

神なびのいはせの社ものよぶこどりいたくな鳴きそ吾が恋まさる(一四一九) 鏡王女

よのつねに聞くは苦しきよぶこどり声なつかしき時にはなりぬ(一四四七) 坂上郎女

のほか、卷九・卷十に作者未祥の歌六首が見える。ヨブコドリも謎の鳥とされ、後世古今伝受の三鳥の一つにも数えられているが、『万葉集』では親しみ深い鳥としてうたわれていて、カッコウにふさわしく、カッコウと見る説が今日では有力になっている。賀茂真淵の『三代集惣説』に、

古今集に、遠近のたつきもしらぬ山中におほつかなくもよぶこ鳥かな、といふ一首により、よぶこ鳥とは猿といふは、三聲叫即人の腸を断なとから文によれるにや、巫峽かなとの山中の詩なればなり、此外の説は覚えはへらす、かの東野州伝の切紙という物に、是はかつほふくと鳴鳥のことなりせしはさることなり、しかるにさるといふ説は野州はとらぬなり、私考えるに、万葉に喚ぶ鳥をよめる歌多き、そか中に専らは夏のうたに有し、さて万葉に坂上郎女、よの常に聞はくるしきよぶこ鳥なつかしき時にはなりぬ、右一首天平四年三月一日佐保著作 という注あり、まこ

とにかつほう鳥、暮春より中夏の頃まで深き木間にかくれてなくは、ほととぎすよりもあはれなるものなり、且万葉に容鳥・杲鳥と書しともに同鳥の事にて、人を喚かこときよぶこ鳥といひ、かほうくとなく声によりてかほ鳥といふ事、諸鳥の名にもさまぐいへる類あるなり。

とあるのが大体當を得ていると思う。

「よぶこどり」という名称も、カッコウの鳴声から考えて不自然ではない。

『万葉考』別記(一)にもほぼ同様の説が見え、「鳴こゑものをよぶに似たればよぶこ鳥といひ」としている。「かんこどり」につき、「かんこどりてふも喚子鳥のよこなはり言也、同じ鳥をさまぐくに名づくるは常の事ぞ」としているが、『万葉集』には「喚子(兒)鳥」のほか、「喚孤鳥」ともあり、カンコドリともよめる。カンコ(ドリ)の語源はカッコウの音転とするが通説になっている様であるが(『大言海』にも「かっこうどりの転」とする)、右の様な事情と関係はないであらうか。後世の歌語としては、諫鼓鳥・閑古鳥の文字をあて、俳諧に好んで用いられる。

『和漢三才図会』に、姿はホトトギスに似、鳴声はカッコウに近い類鳥とし、『周遊奇談』には前記のようにカ

ホドリ・ヨブコドリ・カンコドリみな同一の鳥と見ている。『物類称呼』には、「蚊母鳥、かつこうどり鳥とも云ふ、俗、かんこ甲州にて豆うゑどりと云ふ、東国にて豆まき鳥ともいふ、大和本草にはく、俗にかんこ鳥を杜鵑の雌也と云うもの遠からず」とあり、カッコウ・カンコドリを同一とし、ホトトギスも同一に近い鳥のように説いている。カッコウを「うゑ豆鳥」とか「豆まき鳥」とかいうのは、鳴く季節との関係かららしい（前掲南方説も参考になる）。カッコウをツツドリ・フドリなどと同一とする説も見え、『重修本草綱目啓蒙』などには更に複雑な用例が挙げられているが、ヨブコドリ・カンコドリとする説に従ってよさそうである。

注8 「きけは」通説「きけは」としている。原文「伎氣波」の「波」は紀州本・細井本に「婆」となっているところから「ば」と訓むのであるが、巻十四の他の歌の表記では「波」は一般に「は」と訓んでいるので、こゝも「きけは」と訓むのが妥当と思う。後から書き添えられた歌としても、巻十四一巻としての表記は統一された筈である。「きけは」ならば、後世国定化された「きけは」と異なり、意味が融通性をもつ。

注9 『略解』もこの歌については、真淵とほぼ同様に説いているが、巻十四の冒頭の歌の注には、

ここに載せたる五首の中、初二首と末一首は東アヅぶりならず。既に久しく奉りて帰りを人の、東にての歌故に是れに入れたるか。或は、京人の東の国の司などにて下りたるが詠めるを、其れも其国に伝はりたるは、其国の歌とて有るなるべし。古今集の東歌にも此類ひ有り。
とあって、小異が見える。

注10 「大伴卿」が誰を指すかについては、旅人とする説が有力であるが、安麿説・道足説もある。誰をさすにしても、とにかく大伴の一族であり、大伴氏の東国との関係を考える資料として注意される。「大伴卿」が誰を指すかという問題は、虫麻呂の生存時期とも関係する。

注11 東歌については、前記のように真淵や千蔭に説があり、近代になり、武田祐吉氏も「東歌を疑ふ」（『アララギ』大正七年九月号所載、大正十年刊『上代国文学の研究』所収）において、特に民謡性に対する懷疑を中心としてとりあげ、土着人の作もあろうが、多くは西方人の旅の歌や机上空想の作らしい、とし、児山信一氏も「万葉集と民謡との関係」（『国語と国文学』大正十四年六月号）や昭和六年刊『新講和歌史』で民謡性と創作性を中心に問題とし、民謡的なのは少ないと見ているが、戦後吉野裕氏は『防人歌の基礎構造』再版（昭和三十一年）の補稿で逆に東歌の民謡性を強調している。吉野氏の説は、巻十四の巻頭の歌を土着の舟唄の類と見るので

ある。土屋文明氏の『万葉集私注』は、全面的に東歌を民謡と見ている。古くは漠然と民謡と見る見解が有力であった。

注12 広義では民謡は流行歌を含むのであるが、狭義の民謡は流行歌と区別される。簡単に言えば、形式が自由であり、野性的・地方的であるのに対して、流行歌は定型性をも持ち得るし、都会性をもつ。『万葉集』の東歌は、すべて定型短歌の形式をもつところから、民謡にあらずとする見解があるが、流行歌の条件にはなっていないのである。ただ東歌は野性的であり、地方色のゆたかな点で、流行歌としては偏した面もあるが、万葉時代は過渡期であって、そうした流行歌もあり得たと考える。巻七・巻十・巻十一・巻十四などには、都会的な流行歌の類が多く入っている様に思う。定型をもつが故に創作歌として、宮廷歌謡と結びつけたりするのは早急すぎるので、流行歌との関係を考え合わせる必要がある。

注13 『万葉集』でも、奈良朝特に天平歌壇のころになると、ホトトギスを田植えや節句など季節の行事に関係させてよんだ歌が多く見られ、「時」に敏感になっっていることが知られるが、「時鳥」という成語は後世のものである。『玉勝間』にも「文選の悲哉行といふ詩に、時鳥多_三好音」とあるは、春の事にて、春鳴もろもの鳥を時鳥といへる也。さればほととぎすを時鳥とかくも、その鳴ころ然いへるが、つひに名のごとなれるにや」とある。(カッ

コウヤホトトギスの表記や異名については、『書言字考節用集』等にも詳説がある)

注14 巻七の二二九番の歌は、巻三の

わが船は枚_ちの湖に漕ぎはてむ沖へなさかりを夜ふけにけり(二七四)

と、「明石」と「枚_ま」を入れかえただけのかえ歌の関係にあるが、二七四番の歌は「高市連黒人羈旅歌八首」とある中の一首であり、黒人のが原歌であろう。こうした歌が改作されて次第に流布し、流行歌としてもはやされて、巻十四あたりにまぎれこんだらしい。三三四八と二二九の関係は、類歌というより類型の作であるが、次の三三四九と二二八との密接な関係から重視される。『万葉集』全巻の編成事情にもつながる問題である。

注15 東歌と宮廷歌謡との関係が問題にされる場合には、防人歌がよく引合に出されるが、同じく東国の農民の歌が主であり、東国方言を用いることが多く、共通性が強く意識されるのは自然である。けれども東歌が野性的で、男女関係にしても、情欲中心なのに対し、防人歌は倫理意識が強く、忠君思想や家族的な愛を主とする点で、対照的な傾向が目立つ。この対照性はほとんど注意されていないが、宮廷歌謡の関係を考える上には重視する必要がある。防人歌ならば、家持も抵抗なく宮中に持ちこみ得たと思われるが、東歌については事情が異なるのであ

る。東歌と宮廷歌謡との関係については、流行歌の問題と合せて、東歌と防人歌の異質性をとりあげる必要があるが、(旧稿で触れたことがある。)本論から逸脱することになるので、早晚刊行予定の著作で改めて吟味することにした。